

中学校区における、互いの学力向上特配（A教諭、B教諭）を活用している例（中学校免許外指導解消、小学校外国語活動）

校名	千代田町立西小学校									千代田町立千代田中学校					
	学年	1	2	3	4	5	6	特支	計	学年	1	2	3	特支	計
学級数	3	2	3	2	2	2	1	1	5	学級数	4	3	3	1	1
特配教員活用状況	A教諭（千代田西小置籍 前期週2 1時間 後期週2 2時間）									B教諭（千代田中置籍 週1 9時間）					
	○毎週月・水・金曜日に小学校で一日勤務 ○4・5年理科（週3時間×4学級＝12時間）担当 ○クラブ・委員会活動各1時間担当 ○担任外									○毎週火・木曜日に中学校で一日勤務（小学校へ出勤後） ○4～9月 1年技術（週2時間×4学級）担当 ○10～3月 2年技術（週2時間×3学級）と3年技術（週1時間×3学級）担当 ○1年担任（道徳1時間、学活1時間、総合1、2学期は1時間、学期は2時間）					
成果と課題	<b>① 兼務教員を活用した教科指導の連携による学力向上</b> ○小学校の理科において、中学校での学習内容にも発展的な学習として触れることで、中学校の学習につながっている。また、パソコンを活用した授業において、しっかりとしたスキルを身につけさせることで、中学校の技術の学習内容につなげている。 ●小学校で理科、中学校で技術という教科が違う組み合わせだったため、学力向上が図れたのか数値的な判断ができなかった。									<b>① 兼務教員を活用した教科指導の連携による学力向上</b> ○専門性を生かした英語の指導ができたので、英語の力が高まった。また、中学校のALTも同行したため、中学校での学習を踏まえた授業が展開できた。 ●英語は週1回の授業なので、実態を把握しそれを授業に生かしていくことが大変。					
	<b>② 小中学校の9年間を見通した教育課程の作成</b> ○9年間の教科の学習で、「子どもの今の学習が今後どこにつながるのか、子どもがどんな学習を行ってきているのか」ということを見通して学習を行うことができた。技術では、小学校の理科の電流の学習が、中2の電気や機械の学習に生かすことができた。 ●小・中の教員同士で、実際に授業を行うことによってよりよい9年間を見通した教育課程の編成ができると思う。また、子どもの変容をどのように捉えていくのが課題である。									<b>② 小中学校の9年間を見通した教育課程の作成</b> ○小学校が英語特例校となり、小学1年から外国語活動（英語）に取り組み、外国語活動主任が中心となって、中学校へつながる教育課程を作成した。そのときに、兼務教員にも相談し指導を受け、よりつながりが明確になった。 ●新学習指導要領を見据えた年間指導計画の作成と英語特例校としての英語（外国語活動）の扱いを工夫していかなければならない。					
<b>③ 中一ギャップ解消に向けた中学校への円滑な接続</b> ○小学校において、授業、クラブ、委員会等の活動の中で、中学校の授業や活動について話をすることによって、進学後のギャップ解消につながっている。また、中学校の技術の授業では、小学校時に関わった生徒たちを教えることができたので、教師・生徒ともスムーズに授業に取り組めた。 ●中1ギャップを解消する具体的な手立てを構築する。									<b>③ 中一ギャップ解消に向けた中学校への円滑な接続</b> ○週1回ではあるが、英語の授業で中学校の教員が来ることにより中学校での実際の様子が聞けるため、児童に安心感を与えることができた。 ●中学校から来る英語教員が誰であっても、同じように児童に対応してくれるよう共通理解が必要である。						
<b>④ 小中のつながりを考慮した校内研修、生徒指導での連携</b> ○小学校の生徒指導において、中学校でのルールに則って同じように行うことで、中学に行っても戸惑うことなく生活できている。また、中学校では、小学校時に身につけた正しい生活習慣を維持することができた。 ●校内研修において小中で共通したテーマをもって研修を行えなかった。									<b>④ 小中のつながりを考慮した校内研修、生徒指導での連携</b> ○小学校での指導が、中学校でどのようにつながっているのかを中学校教員に理解してもらい、アドバイスを受けることで、小学校の研修や生徒指導に生かすことができた。 ●教科の専門性、児童・生徒の発達段階に応じた指導を、体系的に行うことが課題。						
<b>⑤ 兼務教員の活用による学校経営上の効果の検証</b> ○中学校で、技術を専門とする教員が授業を行うことで、教科の専門性が高まったり、授業力が高まった。 ●小中9年間で子どもを育てるという教員の意識を高めることが課題である。									<b>⑤ 兼務教員の活用による学校経営上の効果の検証</b> ○小学校で英語専門の教員が、授業に関わることで専門性が高まり、小学校教員の英語に対する意識も高まっている。 ●中学校の英語教員と小学校の外国語活動主任の話し合いの時間をもつことが厳しいため、本校の英語指導の課題に対してのアドバイスを受けることが時間的に難しい。						
<b>⑥ その他</b> ○中学校には技術科の免許を持っている教員がいないので、免許を所有している教員が来校することにより、免許外の教員の指導と違い専門的な指導を行うことができる。そのため、生徒も興味・関心を持って授業に取り組むことができています。 ●技術科の教員が来校する日（曜日）が決まっているため、授業がカットになってしまったときの埋め合わせが困難であり、クラスによって授業時数に違いがあり、進度に差が出てしまっている。授業時数の確保、並びに均等化が図れるように小中で連携して年間行事計画を立て、曜日を入れ替えたりすることができるようにしていけるとよいと考えている。															